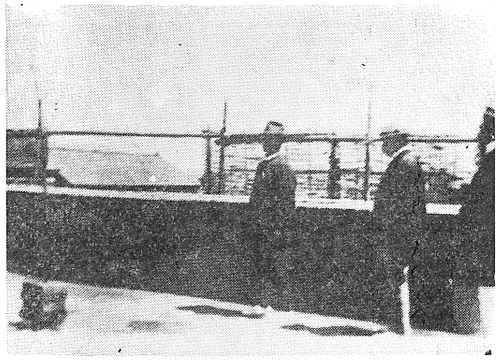
金子直吉翁を偲ぶ

永井幸太郎

金子さんのことは、かなり世間に広く伝えられており、また先に同翁頌徳会が編輯した伝記等によって更に世に広く伝えられているけれども、私からこれを見るといづれも群盲象を撫するの嫌いがないでもない。私がここに同翁の全般を伝えようとしても、やはりその群盲の一人たるをまぬがれないが、漫画家がカリカチュアを画くときにその特徴を捉えて描写を試みるような気持でここに所感を述べて見たい。

私にとっては同翁は師父と呼んだが一番適切なように思われて、尊敬と親しみと信頼とを今に至るも、なお禁じ得ないのである。



☆海岸通十番上棟式の金子翁（左）
＝大正七年焼打ち直後のこと＝

・金子さんは失敗したか成功したか

世俗的な意味では、鈴木の事業が解体して多くの人の手に分離せられたという事が、失敗であるといえば失敗である。ただし私から考えれば立派に成功したと言って憚らない。

金子さんがわが国において先鞭をつけた事業の主たるものを数えて見れば、帝国人絹の如きこれは初めに、ドイツから人絹の見本が神戸税関に輸入せられてより直ちにその事業の研究実験に着手し、他の同業会社と異り、外国に対しなんらの特許料を支払うことなく、これには勿論帝人の故久村さんの力によることが多いといえども、久村さんをあくまで指導して今日あらしめたる如き、また神戸製鋼所を育成して特異の鉄鋼兼機械工業を盛り立てたり、又わが国油脂界の王座を占むる豊年製油の如きは、旧来の大豆圧搾法よりベンヂン抽出に転換する如き事は、当時においては油脂界における革命的な事柄と目されていたものを、勇敢に取り上げたが如き、又、わが国に化学工業を発達せしむべき必要を痛感し、大日本塩業会社を創立して青島関東州における塩田を開発したる如き、領台直後、後藤新平氏の懇請黙し難く台湾を視察して同島における糖業政策樹立に当り、或は肥料界に於ては、当時独逸のハーバー式高圧高熱の空中窒素固定の方式にあらざれば硫安肥料の製造不可能にして而もハーバー式に対する不利なる特許料支払を強要せられたる際、敢然としてクロード式のハーバー式よりも遙かに低温低圧なる空中固定窒素製法に成功し、今日わが国化学肥料の発展に大なる貢献をなしたる如き、なお他に指を屈するに遑なき次第であるが、これらの事業は、世人の知る通り戦前戦後においてわが国経済発展のため重要なる役割を果していることは、今更喋々するを要しないところである。金子翁の常に口にせし如く生産報国の大目的は十分に成功を納めたるものと言うべく、仮りに昭和二年の恐慌に堪ええて、鈴木の傘下にこれらの事業を一財閥の下に把握し得たとしても、終戦後財閥解体の運命に立ち至りしなるべく、その結果は敢えてなんらの差違なき事となったであろうと思われる。やはり私は、金子さんは立派に成功した人であると言うことを憚らぬのである。

ただ、世間的に見て、鈴木の事業としてどうして、ああいう結果になったかをたづねて見るのにその原因はただ一つある。それは金子さんという人は、個人としては自ら持すること極めて薄く、性極めて恬淡自分一個の私慾という事がなかったが、その事業慾、事業に対する支配慾の極めて旺盛なるため、資本を公衆より求め、多数の株主から掣肘を受けることを極めて嫌ったために、株式資本によって事業を営むことをきらい、特殊銀行等の借入金等によって事業を経営しようとの考えが強かったがために、当時事業不振の会社は続々として或は減資、或は減配、無配当等によって事業の立直りを策することができたけれども、借入資本による場合減資はもとより不可能、斯る場合には利息も高く払わねばならぬというようなために、鈴木としては解体を余儀なくされた次第であって、その差違はただそれだけの事である。失敗といえばこれだけのことである。ただし志すところ、事業報国であったので翁としては残念であったろうが、翁の主たる目的は成功されたものと私は考える。

・金子さんのただ一つの愚痴

金子さんはいかなる場合でも決して愚痴を言わなかった人である。いかなる場合でも禍を転じて福となし、前の失敗を今後の訓戒として決して愚痴を零さぬ人であったけれども、ただ一つ私は翁の口を洩れた愚痴を聞いた。それは日露戦争直後の事であって当時鈴木も大里製糖その他の事業に忙しく、且つ当時では流石の金子翁も銀行から借金をするという事はそれ程やってもいなかったので、大して遊金もなかったのであるが、日露戦争の戦前内外綿会社の所有であった西宮の紡績工場と、神戸の葺合にあった今の神戸製鋼所の前身東京の小林という人が経営しておった小林製鋼所というのがあって、両方共、同格の四十万円で売りに来たので両方共買いたかったけれども、当時それだけの余裕がなくて小林側の熱心なる勧誘にほだされ、とうとう小林製鋼所の方に投資をして爾来今日の神戸製鋼所に至るまでには随分と苦心をしたものだが、若しその時紡績の方に投資をしていたならば、今日鈴木の運命も頗る違ったものであったろうと、鈴木解体後に洩らした事がある。これが唯一の翁から出た愚痴であったと私は思う

・スターリンは独裁者である。

金子さんも独裁者であった。

スターリンは言っている「指導者は大衆より後れてはならぬが先んじても不可である。大衆と共に進まねばならぬ」と。時々金子さんは大衆に先んじ時勢の熟するを俟たずして進み過ぎた場合もあった。従って世間や政府が、金子さんの説を受入れないで笛吹けども踊らず、自分で焦慮しておられるようなことが多かったように思う。

すなわち、上にのべたような日本で人造絹糸の事業を創始したり、今は豊年製油となっている、大豆のベンジン抽出法を満鉄が試験的にやってその大規模実行を躊躇しているのを、自ら先鞭を附けて断然工業化したり、硬化油工業が僅かに独逸、和蘭で成功しつつある際に専門家を欧州に派遣し、研究せしめて日本で最初にこれをやられた如き、その他大小の例は沢山あるがその先見の明と実行力の強い事と果断である点において、将に独歩の地位を我邦事業界に占められたといってよろしい。しかし、これらの事業も国家的には非常に役に立ったが、時世よりも一歩先んじすぎていたため自ら苦労されたことも多い。

・金子さんは思慮周密、注意周致であった。

殊にその前半生において然りであった。大里に製糖所を建設するに当り、爪哇から原料糖を輸入するにも精製糖を支那へ輸出するにも、燃料石炭を得るにも北九州の一角、大里の優秀なる地点であることを見抜かれたのは勿論敬服する次第である。これも今から見れば当然の事であるけれども、当時多くの事業家が北九州に眼を注がぬ時に金子さんが鋭くもこれに眼をつけたところは偉いと思う。ところが当時の競争者としては香港にあるジャーデンの製糖所であって、金子さんはひそかに人を香港に派して同製糖所の煙突の煙の出る日数と時間とを報告させ、上海その他各地へ砂糖を積出す在荷の統計を取らせたりして、その製造高と輸出量も手に取る如く知っていたと言っておられた。

又薄荷の競争相手は米国の某州にある。それで今は故人となった小林恒三郎君を米国に留学させて勉強の傍ら、米国の薄荷の出来高を刈取りを待たず速報せしめていた。謀を密にし敵情を知悉するためにこのような周到な注意を払っておられた。惜しい哉、後年事業が余り多くなり、多忙を極められてからはこの特長は幾分歪曲せられたように思う。

このように金子翁は寝ても起きても事業の事のみに没頭し、世間の見る処は、人触るれば人を切り、馬触るれば馬を切ると言うような鋭いという事ばかりが知られているが、一面掬すべき温情と豊かな気持を持っておられた。時利あらずして事業経営の上に非常な困難に際会した時でも案外余裕があった。そして常に得意の俳句をものしておられた。

翁の多数の俳句の中から多少経済時事諷詠と言ったような句を一、二拾い出して見よう。

先年綿糸相場大波瀾の際、解合の話の始った頃

崩れそうに見えてくづれぬ雲の峰

鈴木商店の経営困難な頃

初雪や　万有銀になり相な

背水の陣屋をかこむ　桜かな
というような句がある。又
決算面白からず
今年は仇花多し茄子畑
物価調節諸事節約のやかましかった頃
褌の長きを論ず　涼みかな
絵日傘の膏薬張りも誇かな
日盛りや帽の代りに頬冠
私が或る事に遭遇して私の方針を変更しようとして度々翁に許しを乞いたるに際し与えられたる句
真直に行けば里あり杵の音
今尚忘れ得ぬ一句である。
その他いくら書いても翁に対する追憶の念は次から次と湧いてくるものがあるが、余り長くなるのでこの辺で擱筆する。

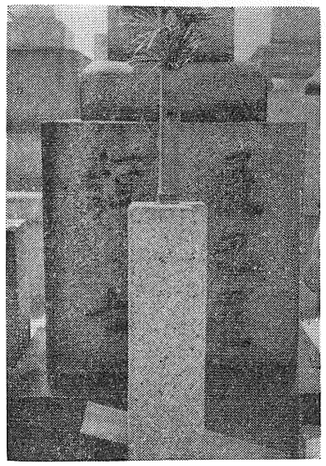
（昭和二十五年十一月或る誌に筆者ものされたもの）

焼き芋商法

柳田義一

（一）

明治二十五年七月初めて国鉄新橋神戸間が開通して間もない頃、下り三等車に歳の頃なら六十そこそこ、もも引の上に縞の着物を附けた、小柄で一くせも二くせもある眼光の鋭い老人が座席の上にあぐらを組んでいた。車が動くにつれ持参の握飯を風呂敷から取り出し、さもうまそうに手摑みで食べながら向い側に座っている手代風の若い男に名古屋弁丸出しで熱をあげて喋っていた。



一心寺にある辰巳屋恒七翁の墓

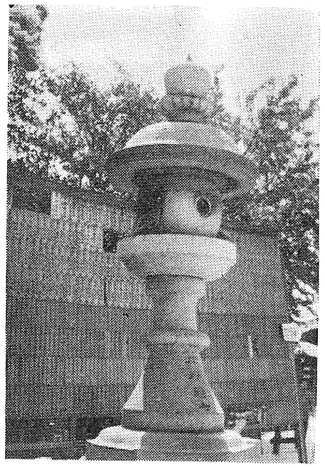
俺は名古屋の釜安と云うて伊勢湾浴線から大阪神戸にまで少しは聞えているはずの商人だが、若い頃から商売にかけても日常の行状にも変わったことをやり遂げて来たものだ。もっとも普通のことをしていたのでは儲りも妙味もないので思い切り人に嫌やがられることも、哄われることも態と思いの儘にたたきあげて来た。握り飯を平げたこの老人、なおも話をやめようとはしない。

君は知っとるかもわからぬが難波の河村瑞軒と云う仁は、盆流しの茄子胡瓜が浪に打ちあがったのを拾い集めて漬ものにして町で売ってひどう儲けた。後に材木商をはじめてこれまた江戸の大火で大いに男をあげた。俺の若い頃はこのような紀文に似た商魂型の男も余り珍らしいものではなかった。

今俺のところの得意先である神戸の鈴木商店には、その基礎を造った辰巳屋恒七と云う多彩の俠商がいた事を思い出す。開港まもなく、貿易を始めると水戸の浪人が首をちょん切ると云う物騒な時代に、横浜、大阪、神戸をかけて茶、砂糖、鰹、象牙、油、豆粕等幾種類かの輸出入貿易を堂々とやってのけた剛のもの、備中からやって来た藤田助七と、武州川越から遍歴の鈴木岩治郎の奇才を認め、晩年のれんのすべてを譲って勇退した大きな人柄も忘れることは出来ぬ。今ではその鈴木には生来疳気の強い岩治郎の膝下には、辰巳屋恒七の忘れ形見である柳田冨士松と、土佐の荒削男と称された金子直吉が、互に手を握り合い昼夜身を粉にして仕えているではないか。相手の男もいつしか、これらの話に釣り込まれるともなく固い座席も忘れ車中聞き惚れて仕舞った。

（二）

こんな話もどこからか聞えて来たのか鈴木の店でもこの型破り釜安さんには特別鄭重に扱うようにした。柳田金子の方にしてもこの老人から発する神経の動きを、見逃がさずにはいなかった。釜安のやり方は世間一般の商人がするような、奇麗な商品に目をつけることが大嫌いの性分だけに、疵ものとか端物とか云った普通の商人の持て余しもの、滅多に取り扱わない品物に興味をもっていて、濡れのある砂糖、艀取りに溜った砂糖の荷粉品、汚点のある洋服地、端物の陶器、輸出用毛布、莨蓙類の不合格品、反物の疵等に目をつけていた。阪神間にこう云う捨てる



恒七翁が献納した石燈籠（一心寺の本堂前に一対あり）

に捨てられぬ難儀もんを抱いて困りぬいている商家を嗅ぎつけることには敏感そのもの、彼は取引が済むと兵庫沖に廻わしてある自分の持船である帆前船安心丸と云うのに積み込み、こうして積み荷が一ぱいになるまで阪神間の目星しい商店を根気よく歩き廻わり金輪際疲れも見せなかった。

何かありそうな店頭に現われては『困りものの持合わせは、疵物や端物は』と訪ねるのを止めなかった。そんな時の安兵衛は地味な木綿着の裾を端折って脚には麻裏草履をはいていた。安兵衛老人の商売振りは一寸普通の商人では出来ないことをやってのける。終日どんな場合でも手帖と鉛筆は手離したことがない。困りものが見付かると早速脹らんだふところからそれを取り出して相手の鼻頭に突きつけて、『お手数をかけてすまんがあんたの手でちょっと品書きを作って貰えませんやろか』とどんな事があっても自分では書かなかった。

売り手の店の書類に持ち合わせた品物の名前、個数、商標、価格等の明細書を作らして出来上がると直ぐそれを懐に捻じ込んで転々と他の店へ行く。又同じように品書を書かして出て行く。こうして兵庫・神戸の得意先を片端しから歩き廻わって、夕方近くきまったようにしてその内の一軒の店先へひょっくりと尻端の姿で引返して腰をかける。夫れを見附けた店員『はら安兵衛さんが帰って来た。さだめしうちの品が一番安かったわけだナー』すぐ品物の値段のことを思い浮かべた。

ところで店の方では別段それが安すぎると云う心配とてはなかった。それは爺さんは小鳥のみそさざいと一緒で最後の一所で一番低い枝を欲しがる気性を呑み込んでいる仲間達だから決して驚かない。老人帰って来るなり値段の掛け合いを始め出す。相手の顔色に頓着なく思い切りとことん値切り合う。どうしても値段に折合いがつかぬと吸いさし煙草を耳にはさんで、今度は話をかえて艀賃のことをくどく。聞き出す。わかるまで何辺も聞く。『値段が折り合わねば仕方がない。ついでだから聞いておくが艀賃の見積りはどれ程だ』と気に喰わん態度で吸いさし煙草を一気に吸うて狸のような眼をむく。『艀賃は五十銭の見積りです』と答えると『よし承知した』と飛ぶようにして店を去って行く。

翌る朝は早くから老人、兵庫の港へ出かけて艀屋と云う艀屋をこれ又片端しから起し歩いて艀賃を問うて廻る。どんなに忙しい時でも二三軒は艀を遊ばせているのがあるもので、爺さんはそんなものをうまく拾うと艀賃を三十五銭に取り決めて、その足で昨日の店へ再び帰って来る。而して是が非でも十五銭だけを値切って得心のいったところで商談を纏めた。そう決まると爺さんはその場で手金を打って相手方の店の者にその受取証を認めさせる。証書に使う用紙はいつも相手方の店の名が刷り込んである葉書に限られていた。第一に手帖や葉書に相手方の手で書かされると、後日になって物議をおこした時の有力な証拠ともなるし、第二にその葉書は手金の受取証にもなれば売買契約書の代用もつとめる。印紙用紙の無駄も省けると云うわけ。第三にはその間じっと考え込むことが出来、次の商売の分別も生まれようと云うもの……

安兵衛さんと懇意なある男がこんな事を聞いて見た。『あんたのようなぬけ目のない商売していたら失敗はありますまいに堅気の商人が手出しの出来ぬ困りものばかりでは』『手前の商売は品物の取引ばかりではない。相手の商人との取組合です。クレームの附いた品ものは荷主に負け目を感じさせるものだ。そこへ喰い込むのが俺の附け目で困りものの品ものも俺の福の神でこざるわい』と洩らしたそうだ。

（三）

或る日安兵衛爺さんが豆粕や砂糖等の二号品を買いに神戸の鈴木を訪れて来たことがあった。例の困りものを漁りに来たことに間違いはない。こんな時そんなもののある方面の兵庫に案内する役は金子さんに振り当てられた。時季は冬だった。朝から霜が降りて寒い風の吹く中を金子さんは爺さんを連れてとぼとぼと歩いた。海岸通にある支那人の煉瓦